國學院大學学術情報リポジトリ

研究論文 北米の日本宗教研究について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 星野, 靖二 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001714

北米の日本宗教研究について

星野靖二

はじめに

日本文化研究再考というテーマに沿い、本稿では北米[1]の日本文化研究、なかでも執筆者の問題関心より特に日本宗教研究をめぐる状況について報告・検討する。

本稿執筆の直接のきっかけは、執筆者が國學院大學とハーバード大学ライシャワー日本研究所[2]の間で交わされている研究協定に則って同研究所に派遣され、二〇一一年四月より二年間客員研究員として現地に滞在して研究する機会を得たことにある。このため、「北米」といっても、現地で見聞した事柄についてどこまで一般化できるのかという問題があることになるが、しかし全米規模の大きな学会の動向に触れることで、可能な限り北米における日本宗教研究をとりまく一般的な状況について述べたい。

日本研究一般について

本論に入る前に北米における日本研究一般の現状について触れておきたい。[3] 一方において、日本語学習者の数に増加傾向が見られるという統計がある。[4] しかし他方において、現地で日本語教育に携わっている教員から今後の日本研究の展開について楽観的な見通しを聞くことはあまり無かった。この背景には学生側の動機と教員側の期待におけるズレがあるようにも思われる。近年の学生の日本語学習の動機として、ポピュラーカルチャー、とりわけマンガやアニメの影響がよく挙げられるが、教員としてはそこから展開させて日本の歴史・文化・社会についても関心を持って学んで欲しいという期待をしているようであった。

これに関連して、日本研究を専門とする研究者の数は一九九〇年代前半をピークとして、その後様々な方面で縮小傾向にある。[5] とりわけ、近年では中国など他の東アジアの国々やその文化についての研究と比較・競合させられているという状況があり、日本研究の教員ポストが「東アジアやアジアでひとくくりにされて、他の言語や地域研究と合併した、あるいはとってかわられたなどの話はいくつも耳にします」[6] という指摘がある。執筆者も同様の話を北米の若い研究者から耳にした。

もともと北米における日本研究者は、日本において日本研究を行う研究者に比べて、とりわけ教育の面において日本に関する事柄を広く教えることが期待・要求されていることが多く、それは研究上の視野の広さにつながっていた面がある。加えてこのような状況下において、日本研究についても専門分野を狭く絞り込んでいくよりも、周辺領域を含めて問題関心を広げていくことが望ましいという考え方が広く見られた。実際に、日本研究が東アジア研究というより大きなまとまりの中に位置付けられている研究者養成大学院もあり、[7] また日本研究を主たる対象としつつ中国

語や韓国語を研究レベルで用いることのできる若手の研究者や、あるいは逆に他の東アジアの地域を主たる対象としながら、日本のことをも取り上げる研究者もあった。この意味において、日本研究を他の国々や文化との比較へと開いていく試みが北米において見られるということができる。[8]

日本研究を取り巻く環境について

次に、北米の研究者を取り巻く日本研究の環境、特に資料環境について触れておく。確かにハーバード大学は充実した日本語資料を所蔵していたが、[9]これはやはり例外的であり、まず基礎的なものを含めて十分な資料があるかどうか、またその活用という問題があることになる。例えば、選書に際して日本専門の司書がいるかどうか、更にいえばその司書がその分野について十分な知識を持っているかということも問題となっている。

これらの問題を個々の図書館・研究機関がそれぞれに対処することは難しく、北米と日本の図書館・研究機関同士が連携する必要がある。これについて一九九一年に国際交流基金と日米友好基金によって北米日本研究資料調整協議会(North American Coordinating Council on Japanese Library: NCC)[10]が設立され、図書館・研究機関同士の連絡調整を行って、環境の整備を進めている。

また、日本研究・教育に電子資料を活用することも行われているが、[11]日本語の電子資料とその公開・活用については、まだまだ推進される余地があるとされている。[12]特に公開に関連して、資料にアクセスしやすいかどうかということが日本研究の間口を広げるという意味で重要になるのではないか——逆にいえば、他に資料にアクセスしやすい研究領域があるならば、あるいはそちらが選ばれてしまうのではないか——と江上敏哲は述べているが、これは日本の日本研究者が考えなければならないことでもあろう。[13]

北米における日本宗教研究について

先行研究

個別の内容に立ち入って触れることはしないが、まず北米における日本宗教研究の動向をまとめた先行研究を挙げておく。北米における神道研究の第一人者で、近代から現代にかけての日本宗教を中心に取り扱っているヘレン・ハーデカ(Helen Hardacre)は一九四五年から一九九五年までを対象として全般的な動向を概観した論文を著しており[14]、また神道研究についての概観も二〇〇三年に発表している[15]。

ハーデカも指摘しているように、概していえば日本宗教の中では仏教が最も手厚く研究されてきており[16]、後述するように現在でもそうした傾向が見られる。これに関連して、ジャクリーン・ストーン(Jacqueline Stone)がアメリカにおける日本仏教研究の動向をまとめて概観しており[17]、更に二〇〇九年にはジェイソン・ジョセフソン(Jason Josephson)がアメリカにおける近代日本仏教史研究の動向をまとめている[18]。

アメリカ宗教学会における日本宗教研究

以下では、現在どのような日本宗教研究が行われているのか、具体的な例を挙げて見ていく。まずアメリカ宗教学会(American Academy of Religion: AAR)[19]における日本宗教研究に焦点を合わせる。

アメリカ宗教学会は、北米における宗教研究者一般を主な構成員とする巨大な学会であり、毎年行われる大会[20]では千以上のパネル発表が行われて一万人以上の参加者を集めている。規模からいってもこの大会は北米の宗教研究者に

とってある種の公共的な空間[21]となっており、多くの――といっても全体に占める割合から見れば必ずしも多くはないが――日本宗教研究に関連する宗教研究者も参加し、後述する「日本宗教グループ」という分科会を中心に交流を深めていた。なお、二〇〇〇年代初頭に日本宗教学会とアメリカ宗教学会の間で組織的な交流が行われていたが[22]、本稿はむしろその後の状況についての話であり、かつ一参加者としての目線での報告ということになる。

基本的に大会のプログラムは、学会内の分科会から推薦を受けた企画を集めて構成されている[23]。分科会には幾つかのレベルがあるが、各々の分科会に申請できる企画数の制限があるため、発表を希望する者は事前に企画を分科会に提出し、そこで審査を受けることになる。日本文化・宗教研究に関しては、「日本宗教グループ」という分科会があり、これは現在二名の議長と五名の運営委員から構成されている[24]。企画によっては「日本宗教グループ」だけではなく、「仏教」[25]や「新宗教運動グループ」などの他の分科会と連携して行われるものもあり、また他の分科会が主催する企画の中に日本関係の発表がある場合もあるが、いずれにしても「日本宗教グループ」がアメリカ宗教学会における日本宗教研究の中心的な位置にあるということはできるだろう。

この「日本宗教グループ」は、日本宗教に関連する企画を広く受け入れているが、現在運営側から企画のテーマの例として挙げられているものは以下のようになる：「宗教とナショナリズム Religion and nationalism」・「堕落という修辞 The rhetoric of decline」・「儀礼の失敗 Ritual failure」・「予言と憑依 Prophecy and spirit possession」・「物質文化 Material culture」・「特定の宗教テクストについてのワークショップ Work-shopping a particular section of a religious text」・「複数の時代を対象にしたポップカルチャーと日本宗教の授業 Teaching pop culture and Japanese religion across multiple time periods」・「民族誌についてのパネルやワークショップ An ethnography panel or workshop」[26]。

これらはあくまで例であるが、運営側の問題関心を見て取る事ができるだろう。特に「物質文化」は、執筆者が米国滞在中に見聞した人文系の研究一般において広く取り上げられていた主題であり、これについては後段で触れる。また「複数の時代を対象にしたポップカルチャーと日本宗教の授業」について、ポピュラーカルチャーと日本宗教の歴史を接続させるだけでなく、それを教える[27]という教育者としての視点が窺われる。

続いて、執筆者が参加した二〇一一年大会と二〇一二年大会における日本宗教関連のパネルを見ていきたい（なお、それぞれのパネルは四本程度の発表からなるが、個別の発表については紙幅の関係で割愛する）。

二〇一一年大会

アメリカ宗教学会の二〇一一年大会は、一一月一九日から二二日にかけてサンフランシスコで行われた。同大会における日本宗教関係のパネルには以下のようなものがあった。

・「日本における新宗教の再生：真如苑を事例として Renewing a New Religion in Japan: The Case of Shinnyo-en」パネル企画者：マリー・W・ダラム(Marie W. Dallam, オクラホマ大学)（※このパネルは「新宗教運動グループ」との共催で行われた）

・「浄土再訪：浄土仏教研究における新たな展開 Revisiting the Pure Land: New Research in Pure Land Buddhist Studies」パネル企画者：スコット・ミッチェル(Scott Mitchell, 仏教大学院)（※このパネルはワイルドカード・セッションとして行われた）

・「ポピュラーカルチャーの中の日本宗教の再文脈化 Recontextualizing Japanese Religions in Popular Cultures」パネル企画者：バーバラ・アンブロス(Barbara Ambros, ノースカロライナ大学チャペル・ヒル校)

・「『日本哲学資料集』の批判的検討 Critical Reflections on *Japanese Philosophy: ASourcebook* (University of Hawai'i Press, 2011)」パネル企画者：ジョセフ・プラブ(Joseph Prabhu, カリフォルニア州立大学ロサンジェルス校)(※このパネルは、二〇一一年に出版された *Japanese Philosophy: A Sourcebook* に対する書評セッションとして行われた)

・「中世日本における論議(仏教議論)：教義知識と社会関係を創出・伝達し、また競い合う手段として Buddhist Debate (Rongi) in Medieval Japan as a Means of Producing, Transmitting, and Contesting Doctrinal Knowledge and Social Relations」パネル企画者：ロバート・シャーフ(Robert Sharf, カリフォルニア大学バークレー校)(※このパネルは「仏教」分科会との共催で行われた)

他に、「仏教」分科会主催のパネルの中などに、パネルの全体テーマ自体は日本と直接関係しないものの、事例として日本のものを取り上げている発表が幾つか見られた。

二〇一二年大会

アメリカ宗教学会の二〇一二年大会は、一一月一七日から二〇日にかけてシカゴで行われた。同大会における日本宗教関係のパネルには以下のようなものがあった。

・「両義性を理解する：近世から現代にかけての日本仏教における女性 Making Sense of Ambivalence: Women in

Early Modern and Contemporary Japanese Buddhism」パネル企画者：ジャニン・サワダ(Janine Sawada, ブラウン大学)(※このパネルは「仏教」分科会との共催で行われた)

・「失われた仏法そして御利益仏教?：松尾恒一によるドキュメンタリーを通して現代から古典までの仏教を探求する Defunct Dharma and For-profit Buddhism? Exploring Contemporary and Classical Buddhism Through the Documentary Films of Matsuo Kōichi」パネル企画者：ポール・グローナー(Paul Groner, ヴァージニア大学)(※このパネルは、松尾恒一(国立歴史民俗博物館)によるドキュメンタリー映像について検討するものである。前日の夜に松尾が二〇〇七年に制作した『薬師寺花会式――行法と支える人々』が上映された)

・「不定形の掟：曹洞禅の律に対する多様な対応 Polymorphous Prescriptions: Divergent Sōtō Zen Approaches to the Vinaya」パネル企画者：スティーヴン・ハイネ(Steven Heine, フロリダ国際大学)

・「宗教による二〇一一年の津波への対応についてのドキュメンタリーと議論 A Documentary and Discussion of Religious Responses to the 2011 Tsunami」パネル企画者、レヴィ・マクローリン(Levi McLaughlin, ノースカロライナ州立大学)(※このパネルは実際にドキュメンタリー『禅の魂 *Souls of Zen*』を上映し、それについて議論するという形で行われた)

また、二〇一一年大会同様、これらとは別に、パネルの中の個別の発題において日本の事例を取り上げているものが幾つか見られた。例えば、「動物と宗教グループ」と「仏教の批判的・建設的再考グループ」の共催で行われた「動物を通した仏教儀礼の再考：近代的な実践の変容 Thinking Animals, Rethinking Buddhist Ritual: Transformations in Modern Practice」というパネルにおいて、「日本宗教グループ」の議長の一人であるバーバラ・アンブロスは「商品化の隠蔽と消費の聖化：二〇世紀日本における動物供養 Masking Commodification and Sacralizing Consumption:

Buddhist Animal Memorial Rites in Twentieth Century Japan」という発表を行っている。

小結――アメリカ宗教学会における日本宗教研究の特徴

以上、ここ二年間のアメリカ宗教学会における日本宗教関係の発表を挙げた。一見、必ずしもパネル・発表件数が多くないように見えるかもしれないが、前述のように「日本宗教グループ」内で審査を経ているため、これがそのまま発表を希望する研究者の数を表しているわけではない。しかしながら、宗教研究全般を取り上げる学会の中で限定的な位置付けであることもまた確かであろう。この点については、次節で述べるアジア学会とは文脈が異なっている。

これとも関連して、まずそれらの特徴として指摘できるのは、北米における宗教研究、あるいは更に広げて人文系の研究一般に見られる研究潮流の影響を受けていることである。例えば「ジェンダー」の問題が極めて一般的な論題であるのは、北米における人文系の研究全般においてそうであることを反映しているという印象を受けたし、「物質文化」がよく取り上げられているのも、必ずしも宗教研究に限ったことではないように思われた。

次に、「日本宗教研究」に固有であるように思われる特徴を二点挙げる。

第一に、仏教研究との結びつきが強く見られることである。端的には幾つかのパネルが「日本宗教グループ」と「仏教」分科会の共催として行われており、また上述には挙げなかったが「仏教」分科会主催のパネルの中に日本の事例についての発表があるものもあった。逆にいうと、神道やキリスト教、新宗教については、それ程多く取り上げられているとはいえない。こうした傾向は、ハーデカが概観した一九九五年までの動向から大きく変化していないということができる。[28]

第二に、文字メディア以外のメディアにも焦点を合わせていることである。これは非文字メディアを対象として研

究するということ[29]に加えて、研究成果をどのように文字メディア以外の形で発信していくかということの検討を含むものであり、その一端としてドキュメンタリーを取り上げたセッションがあった[30]。

こうした傾向は、「物質文化」にも関連しているため、より一般的にも見られたものであったが、「日本宗教研究」に関しては特に教育という視点を指摘することができる。すなわち、北米における日本宗教研究者の多くは、北米の高等教育機関における日本宗教の教師でもあり、教育に活用しうる映像メディアに対する高い関心を見て取ることができた。

他方で、日本の日本宗教研究者が発信をする場として、アメリカ宗教学会はどのような性格を持っているだろうか。もちろん、発信に足る研究成果を挙げていることが大前提である。分科会、特に日本宗教に焦点を合わせる場合には「日本宗教グループ」に企画を組み上げてから応募することが推奨されていることや、また北米における研究状況の把握という文脈の問題などもあって、英語母語者ではない日本の研究者が企画を立ち上げる段階から音頭を取って進めることは、やや敷居が高いという印象を受けた。実際に、日本から来た英語母語者ではない研究者が登壇したパネルもあったものの、パネル企画者は基本的に北米の研究者であった。このことからも、学会レベルの交流などを抜きにして、個人レベルで考える場合には信頼できる英語圏の日本宗教研究者との共同作業によって自らの研究成果を発信するという形態が望ましいように思われる。

アジア学会における日本文化・宗教研究

次に、アジア学会(Association for Asian Studies: AAS)[31]における日本文化・宗教研究について触れたい。アジア

学会は、北米におけるアジア研究者を主な構成員とする学会であり、世界中に八千人ほどの会員を持つという。[32] 年次大会は毎年三月に開催されており、執筆者は二〇一二年三月一五日から一八日にかけてトロントで開催された大会に参加する機会を得た。以下同大会における日本文化・宗教に関する発表を見ていきたい。

二〇一二年大会とその傾向

プログラム上では総数で三七八のパネルがあり、それが「中国と内陸アジア」(一〇八)・「日本」(六〇)・「南アジア」(三〇)・「東南アジア」(三一)・「コリア」(二九)・「地域横断」(一二〇)という六つのカテゴリーに分けられている。基本的に日本研究に関する発表は「日本」あるいは「地域横断」に分類されることになるが、実際には他の地域カテゴリーの中にも日本を取り上げている発表が散見された。このように見るならば、アジア学会において日本研究は、最も重要とはいえないまでも、大きな位置を占めているということができるだろう。

多くの日本に関するパネルの中で、特に宗教研究に関係するものとしては以下の六つが挙げられる。

まず「日本」カテゴリーに三つのパネルがあった:

・「一五~六世紀における政治権力と神仏関係 Political Power and the Relationship Between Gods and Buddhas in Fifteenth- and Sixteenth-Century Japan」パネル企画者:クリストファー・メイヨー(Christopher M. Mayo, プリンストン大学)[33]

・「津波のその後で:東日本大震災に対する宗教的反応について In the Wake of the Tsunami: Perspectives on Religious Responses to the March 11, 2011 Great East Japan Earthquake」パネル企画者:レヴィ・マクローリン[34]

・「「それは宗教ではない」:近代日本における宗教性をめぐる交渉 "It's Not a Religion": Negotiating Religiosity

in Modern Japan」パネル企画者：ジャスティン・シュタイン(Justin Stein, トロント大学)[35]

次に「地域横断」カテゴリーに三つのパネルがあった：

・「一八六〇年代から一九三〇年代にかけての日中における諸宗教の構築 The Construction of Religions Between China and Japan, 1860s - 1930s」パネル企画者：グレゴリー・スコット(Gregory A. Scott, コロンビア大学)[36]

・「帝国のための信仰の表象：近代日本における宗教・ナショナリズム・帝国主義の関係の再考 Representing Faith for Empire: Rethinking the Relationship Between Religion, Nationalism, and Imperialism in Modern Japan」パネル企画者：シドニー・シュイ・ルゥ(Sidney Xu Lu, テネシー大学)[37]

・「日本とその隣人：現代におけるトランスナショナルな追悼について Japan and its Neighbors: Contemporary and Transnational Memorial Perspectives」パネル企画者：アレクサンダー・ベノー(Alexandre C. Benod)[38]

これらの特徴についてであるが、第一に東日本大震災を取り上げ、それに対する宗教の対応について検討したレヴィ・マクローリン企画のパネル[39]が多くの参加者を集めていた。日本研究一般という点から見ても、東日本大震災は様々なレベルで関心を集めていたといえる。

第二に、学会の性格とも関連して、より地域横断的、あるいはトランスナショナルに考察していこうとする方向性が強く見られた。これは端的には「日本」というカテゴリーではなく「地域横断」というカテゴリーに幾つかパネルがあったことに見て取ることができる。また内容的にも植民地の問題と関連して、日本の事例を東アジアとの関連において捉えようとする姿勢が打ち出されていた。

これに関連して、北米における日本研究が、あるいは東アジア研究という枠組の中に位置付けられることがあるこ

とを本稿冒頭で述べた。この大会で見られた地域横断的に検討していこうとする方向性は、こうした状況を受けた生産的な対応であるように思う。この点についても結論部であらためて触れる。

第三に、これは宗教研究の近年の傾向を受けたものでもあるが、宗教概念の歴史性を議論の前提とし、その上で次の展開を模索する研究が幾つか見られた。特に「地域横断」カテゴリーにあるグレゴリー・スコット企画のパネルと、シドニー・シュイ・ルゥ企画のパネルは第二の特徴と第三の特徴を共に備えた興味深いものであった。

アジア学会、地区大会

なお、前節で述べた北米全土から参加者を集める年次学会とは別に、アジア学会は地区別の大会も開催しており、米国本土で八つの地区大会が行われている。[40] 執筆者はアジア学会ニューイングランド地区(New England Association for Asian Studies: NEAAS)の二〇一一年大会と二〇一二年大会[41]に参加する機会を得たが、いずれも小規模な大会[42]で発表者は若い研究者・大学院生が多く、研究発表の経験を積む場になっているという印象を受けた。これはまた、北米におけるアジア研究の裾野の広がりを示してもいるだろう。

これに関連して、日本でも地区大会の一つとして日本アジア研究学会(Asian Studies Conference Japan: ASCJ)[43]が毎年六月頃開催されている。発表者には日本人研究者や日本で活動している英語を母語とする研究者などがあり、加えて時期的に北米の大学が夏期休暇中であることから、調査のために来日している北米の若手研究者も見られる。

なお、二〇一四年の夏より、米国で開催されるアジア学会大会とはまた別に、アジア学会アジア大会(AAS-in-Asia)というアジア地区で開催される大会が始められるという。[44] これは三〇〇人から五〇〇人程度の参加者を見込んでいる

とのことで、地区大会よりも大規模な大会となる。

発信の場としてのアジア学会

それでは、日本の日本宗教研究者が発信をする場として見た場合、アジア学会をどのように位置付けることができるだろうか。まず、アジア学会はやはりアジア研究を中心としており、日本研究がその中で一定以上の割合を占めていることを考えると、アメリカ宗教学会よりも間口が広いということができる。パネル単位での申込が推奨されているが、個人発表の申込も排除されていない[45]という点においても、より申請しやすいということもあるだろう。しかしながら、開催時期が例年三月中旬から末にかけてとなっており、これが日本の大学に所属する研究者にとって予算執行の関係などで問題となるかもしれない。

地区大会について、米国本土で開催されるものに関しては、そこで発表するために渡米するということはあまり現実的ではないだろう。むしろ留学や在外研究などで現地に滞在中の大学院生や研究者にとって研究発表を行う機会となっており、比較的分野の近い研究者と交流する良い場となっていた。他方、日本アジア研究学会については何よりも日本で開催されるという点において参加しやすく、またアジア学会アジア大会も米国本土で開催される年次大会に比べれば参加しやすいということができる。これらの学会は日本の研究者が英語を用いる海外の研究者に自らの研究成果を示し、交流する一つの機会となるだろう。

おわりに

以上、アメリカ宗教学会とアジア学会での状況に触れながら、北米における日本宗教研究の動向について述べた。

最後に、執筆者がハーバード大学において見聞した日本研究・日本宗教研究に関する動向と合わせて、あらためて北米における日本宗教研究に関して特徴的な傾向について見ておきたい。

なお、ハーバード大学には多くの日本研究者が在籍しており[46]、例えば文化人類学のテオドル・ベスター(Theodore C. Bestor)や歴史学のアンドリュー・ゴードン(Andrew Gordon)など著作の邦訳がある研究者がいる[47]。特に日本宗教研究に焦点を合わせるならば、前述のヘレン・ハーデカと、日本の密教を中心に取り扱っている阿部龍一の二人が中心となっているが、中国中世における仏教と道教の交渉などを専門とするジェームス・ロブソン(James Robson)も日本宗教に関心を持っていた。

東日本大震災

ハーバード大学の日本研究一般に関する動向で注目すべき点は、当時ライシャワー日本研究所の所長であったゴードンの主導の下、東日本大震災直後に「２０１１年東日本大震災デジタル・アーカイブ[48]」という企画が立ち上げられたように、東日本大震災とその後の日本社会に強い関心が払われていたことだろう。関連してそこに宗教がどのように関わっていたのかについて、アジア学会の大会で強い関心が持たれていたことについては前述した通りである。

このアーカイブ企画以外にも東日本大震災に関連する様々な催事が行われ、東日本大震災とその後の対応を現代社会に共通する問題として展開させ、共有して論じていこうとする姿勢が見られた。しかしこれに対して、日本研究に対する関心が相対的に低下する中で、災害に乗じて新たなブームを作り出そうとしているのではないかという批判的な見解も多少語られており、実際にこれらの動きから一定の距離を取っていた研究者もあったことを指摘しておきたい。

物質文化

前述で、アメリカ宗教学会に関連して「ジェンダー」と「物質文化」が論点として良く取り上げられていることに触れたが、ここでは「物質文化」についてあらためて述べておきたい。

この「物質文化」は material culture の訳語であるが、あるいはモノ文化と訳した方が良いかもしれない。これについて、文字資料だけに限定されないモノ[49]に焦点を合わせるという広い意味では、考古学や文化人類学、あるいは美術史や映画学、更には建築学などにおいて既に研究蓄積があることはいうまでもない。

しかし、近年の「物質文化」研究では、モノ資料そのものをそれとして検討する――例えば実体としてのモノそのものや、あるいはモノそのものの価値――だけではなく、対象のモノを焦点として、そこからその周囲の社会・文化状況を検討するという方向――例えば、モノがどのように機能してきたのか、あるいはモノがどのように解釈され、そしてその解釈が流通してきたのか――において研究が進められてきている。

滞在中に見聞した様々な催事を通じて、この論点が人文系の研究一般で広く注目されていることを実感させられたが、もちろんこれは日本研究・日本宗教研究においても取り上げられており、美術史や建築史などとも関連して「物質文化」を切り口とした日本宗教研究が積み重ねられてきている[50]。

逆に、近年の研究状況において北米の日本研究者・日本宗教研究者が「物質文化」という切り口を重要なものとして考えているということを日本の研究者が把握し、それに日本で蓄積されてきているモノ資料についての研究をうまく接合させることによって、より豊かな研究成果が期待できるのではないかと考える。

トランスナショナル

最後に、なぜ北米における日本研究を取り上げる必要があるのかについて述べておきたい。現実的な問題としての言語の壁をひとまず棚上げしたとしても、日本における日本研究と北米における日本研究とを比べて見た場合に、もちろん共有されるものもあるにせよ、両者がそれぞれに異なる文脈や、あるいは異なる問題関心に基づいて行われていることはいうまでもない。

しかし、逆にその差異を認識し、お互いに比較対照することを通じて、自らの研究を反省的に振り返り、より豊かなものへと開いていくことができるのではないかと考える。既に歴史的な研究が一国史的な視点を脱するべきことは指摘されてきており[51]、日本研究をアジア研究、あるいは世界史的な状況において検討するという方向性は日本でも進められているところであるが、例えば北米における日本研究を参照することによって、これをより展開させていくことができるだろう。また、日本を事例として宗教研究一般に対する理論的な貢献を目指すといった研究[52]などからも学ぶところがあるように思われる。

他方で、北米の日本研究者からしてみると、日本の研究者からの発信を望んでいる面がある。執筆者は日米の仏教研究者がお互いの研究成果について報告・議論するという学際的な国際シンポジウム[53]に参加する機会を与えられ、そこで生産的な対話がなされていることを実感したが、同種の試みがより多くなされることを希望する——あるいは日本の研究者がより積極的に発信してくれることを希望する——という北米からの参加者の言が印象に残っている。

結論

以上、主に執筆者の見聞に基づいて北米における日本文化・宗教研究について多少述べた。本稿の執筆に際して、日本の大学においても「グローバリゼーション」がいわれる中で、日本と海外における日本文化・宗教研究の意義をどのように打ち出すか、あるいはその国際的な威信をどのように高めるかといった文脈が全く無関係なわけではない。しかし、繰り返しになるが、ここで強調したかったのは、むしろ日本の日本研究と北米の日本研究がお互いの違いを認識した上で対話を深めていくことの重要性である。もちろん、この対話の結果としてどちらかがどちらかにずるずるべったりの迎合をするという事態が生じるべきではないが、さりとて相互変容を全く伴わない儀礼的なものに終始すべきでもない。むしろ、積極的に彼我の違いを意識することによって、新たな視座へと開かれていくことに生産的な意義があるのではないだろうか。

更にいえば、本稿は事例として北米の日本文化・宗教研究に焦点を合わせているが、日本の日本文化・宗教研究がどのような相手であれ対話に開かれてあるべきであることはいうまでもない[34]。もちろん日本文化・宗教研究は日本文化あるいは日本宗教という歴史的事象にひとまず焦点を合わせるものであるが、その固有性に(特に日本の研究者についてはそこにある種特権的に)拘泥するのではなく、様々な視座に対して開かれていくことが、翻って日本文化・宗教研究をより豊かなものにしていく一つの方向性であると考える。

註

(1)基本的にはアメリカ合衆国を念頭においているが、カナダの特に英語圏の研究機関・研究者との間に緊密な交流が見られるため、本稿では北米という言葉を用いている。

(2)ライシャワー日本研究所(E.O.Reischauer Institute of Japanese Studies)は、もともと一九七三年に日本研究所(Japan Institute)としてハーバード大学内に設立された。その設立に尽力し、所長も務めたエドウィン・O・ライシャワー氏を記念して一九八五年に改称して現在の名称となっている。

(3)本稿での記述は、主に執筆者が現地で日本研究に携わっている研究者・学生から聞いた話に基づく。統計などの客観的な情報については、適宜別の研究を参照して補いたい(例えば江上敏哲『本棚の中のニッポン――海外の日本図書館と日本研究』笠間書院、二〇一二年、また寺澤行忠『アメリカに渡った日本文化』淡交社、二〇一三年、など)。

(4)高等教育における日本語学習者の数は、「二〇〇三年の四万二〇〇〇人、〇六年の四万五〇〇〇人から〇九年には五万七〇〇〇人へと、殊に近年はかなり増加傾向を示している」(寺澤、前掲書、一一四頁)という。なお、中等教育では縮小傾向にあるとも述べられている。

(5)一九九五年と二〇〇五年の比較において、研究者の総数は一五四名から一二三六名へと減少している。(寺澤、前掲書、一三八頁。なお、寺澤の記述の典拠は以下の二冊の調査報告書である：Japan Foundation, *Directory of Japan Specialists and Japanese Studies Institutions in the United States and Canada: Japanese Studies in the United States* University of Hawaii Press, 2006; Japan Foundation, *Japanese Studies in the United States and Canada: Continuities*

and Opportunities, University of Hawaii Press, 2007)。

(6)江上、前掲書、一一八頁。

(7)例えばハーバード大学で日本研究プログラムが配置されているのは「東アジア文明言語学部」であり、カリフォルニア大学バークリー校やコロンビア大学には「東アジア言語文化学部」がある。

(8)これに関連してキリ・パラモアは、ライデン大学、ベルリン大学、ハーバード大学における日本思想の研究史を振り返り、特に一九六〇年代以降のハーバード大学においては日本のみに焦点を合わせるような研究傾向が強く、それ以前の研究に見られていた比較の視座が失われていたと指摘している。これは本文で述べたことと逆の方向性であるが、同時にパラモアは、近年の若手の研究者の中には、あらためて「日本」についての研究を比較の視点を組み込んだより広い枠組みにおいて行う者が出てきているとしており、これは本稿の趣旨と一致している(キリ・パラモア「東洋学における日本思想――ライデン・ベルリン・ハーバードの事例を通して」『「日本」と日本思想』岩波講座日本の思想第一巻、岩波書店、二〇一三年、参照)。

(9)ハーバード大学にはまず東アジア研究に焦点を合わせたイェンチン図書館(Harvard-Yenching Library)があり、三〇万冊規模の日本語書籍を所蔵している。同館には日本語資料を担当する専任の司書がおり(現在はマクヴェイ山田久仁子)、積極的に資料の充実を図っていた。またファン図書館(Fung Library)内にライシャワー日本研究所が運営する「現代日本文書センターDocumentation Center on Contemporary Japan」(司書、坂口和子)がある。主な所蔵資料は新聞や一般雑誌であるが、更にイェンチン図書館と協力して日本研究に関する電子資料を作成・整理し、これに関する研究者支援を行っている。

(10)北米日本研究資料調整協議会公式ウェブサイト：http://guides.nccjapan.org/homepage

なお、同ウェブサイトには日本の大学図書館の資料を利用する際の一般的な手続きや、あるいは個別の大学図書館の概要紹介（例えば國學院大學図書館 http://guides.nccjapan.org/content.php?pid=256842&sid=2119927）といった情報が掲載されている。

(11)執筆者が参加した二〇一二年のアジア学会ニューイングランド地区大会において、日本について教える際に、どのようにインターネット上の無料の情報を活用できるかということをテーマとしたワークショップが行われ、辞書サイトや論文検索サイト、あるいは英語版神道辞典のようなウェブサイトが有用なものとして挙げられていた。

(12)江上、前掲書、一九九頁。

(13)江上、前掲書、一二一頁。

(14)ヘレン・ハーデカ著、市川浩史・畑中健二訳「戦後における日本宗教研究の進展」『季刊日本思想史：特集－アメリカの日本研究：現在・未来』六一、二〇〇二年。原文は Hardacre, Helen. "The Postwar Development of Studies of Japanese Religions," in *The Postwar Development of Japanese Studies in the United States*, 1998。なお、未見であるがヘザー・ブレア(Heather Blair)「Japanese Religions― アメリカにおける日本宗教研究」『東アジア比較文化研究』六、二〇〇七年もある。

(15)ヘレン・ハーデカ「米国における近現代神道研究の現状と展望」『神道・日本文化研究国際シンポジウム（第1回）各国における神道研究の現状と課題』國學院大學21世紀ＣＯＥプログラム二〇〇三年。

(16)ハーデカ、前掲「戦後における日本宗教研究の進展」、七一～三頁。なお、一九四五年から七五年にかけては日本のキリスト教についての研究も多かったことが指摘されているが、その後は、日本に赴くアメリカ人宣教師の数が減少していくのに合わせて研究も少なくなっていったという。

(17)ジャクリーン・ストーン「アメリカにおける日本仏教研究」『ハンドブック日本仏教研究』法蔵館、一九九六年。

(18)ジェイソン・ジョセフソン著、辻村志のぶ訳「アメリカにおける近代日本仏教史研究」『季刊日本思想史：特集近代仏教』七五、二〇〇九年。なお、掲載誌の特集が「近代仏教」であるように、これは日本において近代仏教研究が近年盛んに行われるようになってきたことと呼応するものである。更にいえば、近年の近代仏教研究は、「日本」やあるいは「北米」など特定の地域に限定されずに、世界史的な同時代性の中で様々な出来事を検討するようになってきている。そして、これは結論部で述べるトランスナショナルな方向性と結びついている。

(19)アメリカ宗教学会の公式ウェブサイト：https://www.aarweb.org/

(20)アメリカ宗教学会の大会は、会員がある程度重複している聖書文学協会(Society of Biblical Literature; SBL)という超教派の聖書学・キリスト教神学を中心とした学会の大会と基本的に共催という形で行われている。これもアメリカの宗教研究の状況の一端を示しているといえよう。なお、過去の大会のプログラムについては以下のウェブサイトで見ることができる：http://www.aarweb.org/annual-meeting/past-future-meetings

(21)例えば、若い宗教研究者を採用するための面接を大会の際に行ったり、また各大学がそれぞれに公的な懇親会を開いて出身者同士の交流を深めるといったことが行われていたりしていた。

(22)二〇〇三年のアトランタ大会では「日本の学者と学問」という特集が行われ、多くの日本人研究者も参加した。この大会とそこに至る日本宗教学会とアメリカ宗教学会の交流については、渡辺学によるレポートがある(渡辺学「アメリカ宗教学会年次大会参加報告記――「日本の学者と学問」特集を中心にして――」『宗教研究』七七巻三号、二〇〇三年。渡辺学「日本宗教学会とアメリカ宗教学会――交流事業の反省と展望」『南山宗教文化研究所研究所報』第一四号、二〇〇四年)。

(23)それ以外に、大会のプログラム委員に直接申し込むワイルドカード・セッションというものも用意されており、既存の分科会に分類できない実験的・創造的な企画の受け入れを図っている。

(24)現在の議長はバーバラ・アンブロス(Barbara Ambros, ノースカロライナ大学チャペル・ヒル校)、マーク・ロウ(Mark Rowe, マクマスター大学)。運営委員はアスカ・サンゴ(Asuka Sango, カールトン大学)、クラーク・チルソン(Clark Chilson, ピッツバーグ大学)、ヘザー・ブレアー(Heather Blair, インディアナ大学)、レヴィ・マクローリン(Levi McLaughlin, ノースカロライナ州立大学)、マイケル・コモ(Michael Como, コロンビア大学)。なお、運営側に中堅から若手の研究者が多いという印象を受ける。

関連して、議長のアンブロスとロウは近年それぞれ研究書を上梓している。アンブロスのものは現代日本の仏教寺院における動物供養について、ロウのものは現代日本仏教における葬儀の問題について取り上げたもので、いずれも北米日本宗教研究の最近の成果として考えることができる(Ambros, Barbara, R, *Bones of Contention: Animals and Religion in Contemporary Japan* University of Hawaii Press, 2012; Rowe, Mark, *Bonds of the Dead: Temples, Burial, and the Transformation of Contemporary Japanese Buddhism* University of Chicago Press, 2011)

(25)グループよりも上位のセクションという区分の分科会である。

(26)http://papers.aarweb.org/content/japanese-religions-group [2013.9.15アクセス]。

(27)これはもちろん、マンガやアニメのような日本のポピュラーカルチャーが学生に人気があることを背景にしたものである。ハーバード大学においても、マンガやアニメと日本宗教の関連についての講義をしてほしいという大学からの要請があったとのことであり、二〇一二年からヘレン・ハーデカは、受講生が将来的にそれを大学で教えることができる――そのように要請される――ということを念頭に置いて、マンガやアニメを通して日本宗教を考え

るというワークショップ形式の講義を開講している。

(28)ハーデカ前掲「戦後における日本宗教研究の進展」、参照。

(29)例えば二〇一一年大会の「ポピュラーカルチャーの中の日本宗教の再文脈化」パネル。

(30)二〇一二年大会における松尾恒一によるドキュメンタリー『薬師寺花会式――行法と支える人々』の上映と、それについて議論するパネル。また東日本大震災をめぐるドキュメンタリー『禅の魂 *Souls of Zen*』を上映して、それについて議論するパネル。

(31)アジア学会の公式ウェブサイト：https://www.asian-studies.org/

(32)「アジア学会について」http://www.asian-studies.org/about/index.htm

(33)個別の発題は以下：「室町時代における天台神道：山王権現の性格の変化について Tendai Shinto in the Muromachi Period: The Changing Aspects of Sanno Gongen」曽根原理(東北大学)、「室町時代における仏僧と天神地祇：「天神渡唐」についての一考察 Buddhist Monks and the Heavenly and Earthly Gods in the Muromachi Period: An Examination of "Tenjin Visiting China"」原田正俊(関西大学)、「一五世紀日本における北野神社と室町幕府 Kitano Shrine and the Muromachi Bakufu in Fifteenth-Century Japan」三枝暁子(立命館大学)、「戦国大名の宗教ネットワークにおける氏神と菩提寺 Memorial Temples and Clan Deities in a Warlord's Religious Network」クリストファー・メイヨー。司会はマーティン・コルカット(Martin Collcutt, プリンストン大学)、ディスカッサントはジャクリーン・ストーン(Jacqueline Stone, プリンストン大学)。

(34)個別の発題は以下：「神罰？近年の自然災害に対する日本人の修辞的・実践的反応 Divine Punishment? Japanese Rhetorical and Practical Responses to Recent Natural Disasters」レヴィ・マクローリン、「感謝の動員：

天理教災害救援ひのきしん隊と三・一一震災 Mobilizing Gratitude: The Tenrikyo Disaster Relief Hinokishin Corps and the 3-11 Earthquake」バーバラ・アンブロス、「災害とその人類に向けたメッセージ：幸福の科学内部での異なる説明 Disasters and Their Message to Mankind: Different Explanations Within Kofuku no kagaku」フランツ・ヴィンター(Franz Winter, ウィーン大学)、「救援から復興へ：二〇一一年から二〇一二年にかけての日本の寺院仏教に見る変化 From Relief to Redevelopment. Transitions in Japanese Temple Buddhism, 2011-2012」ティム・グラーフ(Tim Graf, ハイデルベルク大学)。ディスカッサントはスティーブン・コヴェル(Stephen Covell)。

(35)個別の発題は以下：「神道的世俗性の形成 Formations of the Shinto Secular」ジェイソン・ジョセフソン(Jason Josephson, ウィリアムズ大学)、「仏教と修養の間：一九三〇年代後半における「真理運動」Between Buddhism and Self-Cultivation: The "Movement for Truth" of the Late 1930s」マイカ・アワーバック(Micah L.Auerback, ミシガン大学)、「レイキ、そしてニューエイジとスピリチュアリティをめぐる日本の言説空間 Reiki and the Discursive Spaces of New Age and Spirituality in Japan」ジャスティン・シュタイン。ディスカッサントはマーク・マクウィリアムズ(Mark W. MacWilliams, セント・ローレンス大学)。

(36)個別の発題は以下：「日中間で翻訳される定期刊行物、経典、そして仏教印刷文化 Periodicals, Canons, and Buddhist Print Culture in Translation Between China and Japan」グレゴリー・スコット、「靖国で会おう：新儒教思想と「国家神道」の宗教性 Reuniting at Yasukuni: Neo-Confucian Thought and the Religiosity of "State-Shinto"」宮本ゆき(デ・ポール大学)、「東洋が西洋と出会う時：田岡嶺雲、ショーペンハウアー、そして明治後期における神秘主義 When East Meets West: Taoka Reiun, Schopenhauer, and Mysticism in Late Meiji Japan」ロナルド・ロフトゥス(Ronald P. Loftus, ウィラメット大学)、「「三国」言説再訪：二〇世紀初期における「日本仏教」の独自性という

物語 Revisiting the 'Three Nation' Discourse: Early 20th-Century Narratives on the Distinctive Features of 'Japanese Buddhism'」オリオン・クラウタウ(Orion Klautau, ハイデルベルク大学)、「近代日中仏教者交流における宗派概念と共有された歴史意識の発生について The Notion of the Buddhist Sect and the Emergence of a Shared Historical Consciousness in Modern Sino-Japanese Buddhist Exchange」エリック・シッケタンツ(Erik Schicketanz, 東京大学)。ディスカッサントはリチャード・ジャフィ(Richard M. Jaffe, デューク大学)。

(37)個別の発題は以下:「一八九〇年から一九〇〇年にかけての帝国議会における宗教政策 The Religious Politics of Japan's Imperial Diet, 1890-1900」トレント・マクシー(Trent Maxey, アマースト大学)、「聖戦としての日露戦争:キリスト教帝国日本という構想 Russo-Japanese War as Holy War: Imagining Japan as a Christian Empire」エミリー・アンダーソン(Emily Anderson, ワシントン州立大学)、「一九〇五年から一九二四年にかけての日本のキリスト教徒による環太平洋女性教育運動 Japanese Christians' women education campaigns across the Pacific, 1905-1924」シドニー・シュイ・ルウ、「植民地朝鮮における「神道」の言説形成 Discursive Formation around "Shinto" in Colonial Korea」磯前順一(国際日本文化研究センター)。司会とディスカッサントはタカシ・フジタニ(トロント大学)。

(38)個別の発題は以下:「聞いたことのない記憶?:大久野島と日本の化学戦による犠牲者 Unheard Memories? Ôkunoshima and the Victims of Japanese Chemical Warfare」アルノー・ドリア(Arnaud Doglia, ジュネーブ大学)、「阿含宗の護摩法要:戦争追悼への宗教的対応 Japanese New Religion Agonshû's Goma Fire Rite : a Religious Response to Remembrance of War」アレクサンダー・ベノー、「問題となる記憶:戦後日本における引き揚げ体験の意味の変遷 A Problematic Remembrance: the Shift in Meanings of the Repatriate Experience in Post War

Japan」コンスタンス・セレーニ(Constance Sereni, フランス国立東洋言語文化研究所)、「錯綜した日韓間の「トランスナショナルな愛情」についてのポスト植民地時代における想像力の文化政治：旧帝国と旧植民地の記憶のダイナミクス The Cultural Politics of Postcolonial Imagination on Complicated 'Transnational-Love' between Japan and Korea : The Dynamics of Memories of Old-Empire and Old colony」イェリム・キム(Yerim Kim, 延世大学校)、「永遠の盟友も永劫の宿敵も無く：中国の記念祭から何を学ぶことができるか No Eternal Allies, No Perpetual Enemies: What Do We Learn from China's Anniversary Commemorations?」邱淑婷(Shuk-ting Kinnia Yau, 香港中文大学)。ディスカッサントは邱淑婷。

(39)レヴィはその後東日本大震災に対する宗教の対応をテーマとした論文を発表している(Levi McLaughlin, "What Have Religious Groups Done After 3.11? Part 1: A Brief Survey of Religious Mobilization after the Great East Japan Earthquake Disasters; Part 2: From Religious Mobilization to "Spiritual Care"" *Religious Compass* 7/8, 2013)。

(40)参考：https://www.asian-studies.org/conferences/regionals.htm

(41)ＮＥＡＡＳの二〇一一年大会は一〇月二二日から二三日にかけてウェルズリー大学において開催され、二〇一二年大会はアマースト大学とマサチューセッツ大学アマースト校において一〇月二〇日に開催された。

(42)例えばＮＥＡＡＳ二〇一二年大会ののべ発表者数は五〇名強であった。なお、地区大会の規模に関しては、地区大会毎に多少差があるようであり、例えば二〇一三年のニューヨーク地区大会は発表者一五〇名程の規模となっている。

(43)参考：http://www.meijigakuin.ac.jp/~asci/

(44)参考：http://www.aas-in-asia.org/index.htm 二〇一四年度大会はシンガーポールでの開催であり、二〇一五年が台北、二〇一六年が京都となっている。なお、発表申込はパネル単位となっている。

(45)しかしながら、個人発表は地区大会で行うことが推奨されており、かつ年次大会では採択率が低いことが発表募集要項に明記されている。なお、個人発表で申し込んだ場合も類似の発表を幾つか集めてパネルが形成されることになる。

(46)日本研究に関連する教員の一覧はライシャワー日本研究所のウェブサイトに掲示されており、二〇一三年九月現在で四三名の名前(基本的には学生の指導をしない名誉教授や、日本語講師なども含む)が挙げられている。なお、これらの教員が全てライシャワー日本研究所を本所属としているわけではない。

(47)例えば、テオドル・ベスター著、和波雅子・福岡伸一訳『築地』木楽舎、二〇〇七年。またアンドルー・ゴードン著、大島かおり訳『ミシンと日本の近代――消費者の創出』みすず書房、二〇一三年、など。なお、アンドルー・ゴードンは二〇一一年から二〇一二年にかけて、テオドル・ベスターは二〇一二年から現在に至るまでライシャワー日本研究所の所長を務めている。

(48)参照：http://jdarchive.org/

なお、日本宗教研究と関連して、この「２０１１年東日本大震災デジタル・アーカイブ」は「宗教者災害救援マップ」と連携している。この「宗教者災害救援マップ」の構築過程と課題については黒崎浩行・稲場圭信「宗教者災害救援マップの構築過程と今後の課題」『宗教と社会貢献』３－１、二〇一三年、参照。

(49)関連して「視覚文化 visual culture」という言葉も用いられてきているが、「物質文化」の方が取り扱う範囲においてより広いことになる。

(50)例えばジェイソンは近代日本仏教研究において視覚文化・物質文化が取り上げられていることに言及している(前掲論文、一五七～一六〇頁)。

(51)例えば、日本学術会議の史学委員会が二〇一〇年四月に提言として出した報告は「史学分野の展望――一国史を越えて人類の歴史へ」と題されている。参考：http://www.scj.go.jp/ja/member/iinkai/tenbou/teigen.html

(52)例えば、Jason Josephson, *The Invention of Religion in Japan* University of Chicago Press, 2012。

(53)ハーバード大学において、阿部龍一、近本謙介らによって催行された国際シンポジウム「日本仏教研究の領域複合的解明の試み―宗派性の超克 Beyond Sectarianism: New Horizons for Interdisciplinary Studies in Japanese Buddhism」(二〇一二年五月一七～一八日)。

(54)再び問題を広げて海外における日本研究一般ということについて、例えば国際日本文化研究センターは『世界の日本研究』を一九九〇年以来一七号まで刊行しており、関連情報を発信している。

また東アジアにおける日本研究について、神奈川大学人文学研究所が二〇一二年一二月に「東アジアの日本研究の現状と未来」という国際シンポジウムを開催した(孫安石「【シンポジウム報告】国際シンポジウム「東アジアの日本研究の現状と未来」」『人文学研究所報』四九、二〇一三年、参照)。他に最近の成果として陳昌洙「韓国における日本研究：多様化と専門化のジレンマ」『立命館国際地域研究』三六、二〇一二年などがある。